

翻訳にあたって

以下の翻訳は、デイヴィッド・ヒューム(David Hume) [1711-76]のエッセイ「エッセイを書くことについて」(Of Essay-Writing)の全訳である。ヒュームは18世紀スコットランドに生まれた哲学者であり、主著『人間本性論』[1739-40] (*A Treatise of Human Nature*)で詳説される認識論、情念論そして道徳論をはじめ、政治論、経済論、芸術論、宗教論さらには歴史書に至るまで、数多くの作品を残した多才な人物としても知られている。本翻訳は、1742年に出版された『道徳・政治論集』第二巻(*Essays, Moral and Political., Vol. II, Edinburgh, Printed for A. Kincaid, near the Crofs, by R. Fleming and A. Allison. M. DCC. XLII.*)に収められた諸エッセイのうちの第一エッセイである。

今回ヒュームの翻訳を発表するにあたり、倫理学講座の水谷雅彦教授による2009年度の特設講義「会話の倫理学」において試訳を検討していただいた。この場を借りて水谷教授、及び授業に参加された皆様に心より感謝申し上げます。また翻訳作業中、杉本俊介氏、永守伸年氏、藪本沙織氏には第一稿に目を通していただき、貴重なご助言を数多くいただいた。深く感謝の意を表したい。しかし、翻訳上の誤り等があるとすれば、その責任がすべて訳者本人にあることは言うまでもない。

林 誓雄

凡例

- 一：訳出にあたっては汎用性を考慮し、*Essays, Moral, Political, And Literary*, ed., by Miller, E. F., Revised Edition, Liberty Fund: Indianapolis, 1987.を底本として用いた。翻訳中の頁数(e.g., 【p. xxx】)、およびアラビア数字でつけられた脚註はミラー版のものである。また、ミラーの「用語解説」にはアルファベットの註をふり、それを翻訳の末尾に一括している。
- 一：ミラーの註とは別につけているローマ数字の註は、訳者によるものである(訳者註は翻訳末に一括している)。
- 一：翻訳中、下線は原文ではイタリックを示しており、〔 〕は文意を補足するために訳者が挿入したものである。また、()は関係代名詞による説明を示すものとして用いている。なお原文には付されていないが、各段落の冒頭に段落番号を付している。

エッセイを書くことについて¹

【p.533】

[1] 獣じみた生活を送っておらず、むしろ精神活動に従事している人類のうち、上品な部類の人々は、学識者たち(the learned)と会話する人々(the conversible)とに分けられるだろう。学識者たちとは、自分たちの本分として、より高度で困難な精神活動を選んできた人々のことであり、こうした精神活動には閑暇と孤独が必要となるので、この精神活動を、長期にわたる準備と骨折りなしに仕上げることはできない。会話の世界(The conversible World)では、社交的な気質と喜びに関する趣味(a Taste of Pleasure)に、次の傾向性が結びつけられる。すなわち、より容易かつ穏やかに知性を働かせ、人間の事柄(human Affairs⁽ⁱ⁾)や日常生活(common Life)の義務について敢えて反省してみせ、

【p.534】

さらに、彼ら [= 会話する人々] を取り巻く特定の人たちがもっている欠点や完璧さについて語る傾向性である。そのような思索のテーマによって [人々が] 深い孤独に追いやられることはなく、むしろそのようなテーマには、仲間達との交際や会話が必要なので、交際や会話は、精神にとって適切な鍛錬となる。こうしたことによって、人類は社交へと集い、そこでは全てのひとたちが、各々の思考や語りを、で

¹ 本エッセイが見られたのは、『道徳・政治論集』第二卷(Edinburgh: Kincard, A., 1742)においてのみである。

きる限り最良の仕方で見せ合い、そして喜びとともに、情報を相互にやり取りするのである。

[2]学識者たちが会話の世界から離れてしまったことは、先の時代〔＝17世紀〕の深刻な欠陥であったろうし、書物に対しても交際に対しても、甚大な悪影響を与えてきたに違いない。というのも、歴史、詩歌、政治、そして少なくとも他のものよりもはっきりとした哲学の諸原理などに時折頼る、ということを経ずに、理性的被造物の愉しみに向いた会話のトピックを見つけ出すことなど、いかにしてできようか。われわれの談話全体は、うわさ話や無駄話を途切れなくつなぎ合わせたものに過ぎないというのだろうか。精神が一層の高みへ昇ることなど決してなく、むしろ常に次のようになるだけではないのだろうか。

おしゃべりだらだら、びっくり、ぐったり

ウィル、こうやっただの、ばあちゃん、ああいっただの²。

[3]こうしたこと〔＝学識者たちが会話の世界から離れること〕によって、交際に費やされる時間は、われわれの人生のうちで、もっとも無益であるとともに最もつまらないものになってしまうだろう。

² この対句のソースは、編者によって見つけ出すことができなかった。それはおそらく、ヒュームが「エピクロス主義者 The Epicurean」で引用する対句と同じ著者、ないし詩からとられている。

[4]他方、学問も同様に、大学や修道院の小部屋に籠ることで、そしてまた世間や愉快的な交際からも退くことで、どん底まで墮落してしまった。そのように引きこもってしまったために、人文学(*Belles Lettres*)^(a)と呼ばれるものはすべて、完全に野蛮なものとなった。というのも、人文学の担い手は、生活に関する趣味(*Taste of Life*)や礼儀作法(*Manners*)といったものを一切身につけず、また会話によってしか得られない、自由で流暢な思考や表現を持ち合わせていないからなのだ。哲学さえもが、このように鬱屈として(*moaping*)世を捨てたような学び方によって破滅した。そして、

【p.535】

その文体や語り口において理解不能なものとしたのと同じように、その結論において得体の知れないものとなったのだ。そして実際のところ、自分達の論究のいずれにおいても、経験というものに尋ねることを決してしなかった人々や、その経験を、それを見いだすことのできる唯一の場所、すなわち日常生活と会話のうちに探し求めたことなど一度もない人々に、いったい何を期待することができようか？

[5]今の時代 [= 18 世紀] の学者たち(*Men of Letters*)が、人類から自身をずっと遠ざけることになった内気で恥ずかしがりやの気性を、大いに減らしてきていること、これは私にとって大いなる喜びである。そ

して同時に、世間の人々が、自分たちの最も快適な会話のトピックを、書物から借用していることを誇ることを、これも私にとって大いなる喜びである。学識者たちの世界と会話の世界との間のこうした連盟(それは、極めて幸いなことに、すでに結ばれ始めているけれど)は、今後の相互の利益のために、さらに改良されることが望まれてしかるべきである。そして、私が公衆たちを楽しませようと努めるときに用いるこのようなエッセイ以上に、その目的にとって有益なものを私は知らない。この観点から考えると、私は自分自身が、学問の国(the Dominions of Learning)から会話の国(those of Conversation)へ遣わされる、ある種の外交官、あるいは大使である、と考えるわけにはいかない。そして私は、これほど深く依存し合っているこれら二国間の良好な交流の促進を、自分の常なる義務だと思ふことにしよう。私は、交際において起こるあらゆることについての情報(Intelligence)を、学識者たちにもたらし、自分が祖国〔=学問の国〕において、有用で愉しみともなる商品を見つけたならば、どんなものでも交際へ輸入するよう努めよう。われわれが、その貿易差額について懸念する(jealous of)には及ばないし、そのバランスを両国に対して維持することは、何ら難しいことではないだろう。この交易の原材料は、主として会話と日常生活によって提供されるに違いない。そして、それらを加工することは、学問のみに任せられた仕事なのである。

[6]ある大使が、駐在を任じられている国の主権者に対して敬意を払わないのなら、それはその大使にとって、許しがたい過失であることだろう。これと同様に、私が、特別な尊敬の念をもって女性たち(Fair Sex)に語りかけないのなら、それは私にとって、まったくもって言い訳のできない過失であるだろう。なぜなら女性とは、会話の帝国の主権者なのだから。私は女性とお近づきになるときに、尊敬の念を忘れない。そして仮に、私の同国人たち、すなわち学識者たち、言い換えれば強情で独立心の強い種族が、彼ら自身の自由〔が減ること〕を極度に懸念しすぎなかったのなら、そして、服従することに不慣れでなかったのなら、私は、女性たちの麗しき手の中に、

【p.536】

学問の共和国(the Republic of Letters)を統べる主権をすら委ねたであろうに。〔とはいえ、〕目下のところ、私の任務は、われわれの共通の敵であり、理性と美との敵であるところの、鈍い頭脳と冷えきった心を持つ連中に対する、攻守連盟を望むこと以上には及ばない。ひとたび連盟を結んだならば、やつらを猛烈果敢に追いつめよう。健全な知性と繊細な情緒とを持ち合わせていない人々を、容赦なく攻撃しよう。さすれば、これらの諸性格〔=健全な知性と繊細な情緒〕が、常に不可分のものであることが分かるはずだからである。

[7]真剣に言って、陳腐なものとならないように、ざっくばらんに言う

ならば、私の意見は以下の通りである。女性たち、つまり分別があるだけでなく教養をも身につけている女性たち(というのも、そのような女性たちにだけ私は語りかけているのだけれど)は、洗練されたすべての書き物について、同程度の知性を持つ男性たちよりも、はるかによく分かっている。そしてもし女性たちが、あらゆる種類の書物や勉学を、男性たちに完全に明け渡すほど、彼女たちのような学識ある婦人たちに浴びせられるお決まりの嘲りに恐れ戦いてしまうのなら、それこそ無用の騒ぎである。そのような嘲りに対する恐れにはただ、愚か者を前にしたときに、女性たちに自分の知識を隠させる効果だけを持たせるようにしよう。愚か者とは、そのような知識を見せる相手ではないし、女性たちのお相手としても相応しくないのである。そうすることは、彼女らに対する優越感をくすぐる男性たちの虚しい権限に、なお一層付け入ることにもなるだろう。しかし我がよき読者ならば、次のように確信することができよう。すなわち、分別があるすべての男性は世事に長けているので、彼女らが知っている範囲内にあるような書物についての彼女らの判断に対して深い敬意を払うということをし、そしてまたそのような男性は、きちんと整理されているわけではないけれど彼女らの細やかな趣味の方に、銜学者や批評家たちのあらゆる鈍^鈍らな努力によりも、一層の信頼を置くということをし。〔例えば、〕趣味のよさは言うまでもなく、女性に対する礼節(Gallantry⁽ⁱⁱ⁾)でも名高い隣国〔=仏国〕において、婦人たちは、ある意味で、会話の世界だ

けでなく学識者たちの世界の主権者でもある。そして、女性でも中でも名うての評者の是認が得られないのなら、いやしくも教養ある作家 (polite Writers) が、あえて公衆へと思いついて乗り出そうとはしないのだ。なるほど、その女性評者たちの判定については、ときおり不平を申し立てられることがある。コルネイユ⁽ⁱⁱⁱ⁾の崇拜者は、ラシーヌ^(iv)がコルネイユに代わって優勢になり始めた頃、コルネイユの偉大な詩人としての面目を保つために、実際いつも次のように言っていたではないか。「あんなにも年老いた人間 [=コルネイユ] が、その [女性] 評者の前で、ライバルとしてそんな若僧 [=ラシーヌ] と賞を賭けて争うだなんてこと、予想だにできなかったよ」と。しかし、こうした見解が不当であることがわかってきた。

【p.537】

というのも、後の世代では、あの [女性評者による] 裁きの場での判定が、結局は承認されてしまったようだからである。つまりラシーヌは、亡くなった後も女性たちの人気の的であるだけでなく、男性の中で最も優れた評者にも人気を博しているからである。

[8]私が、女性たちの判断をなかなか信用できないテーマがひとつだけある。それは、女性に対する礼節、及び敬虔(Devotion^(v))についての書物に関するものであり、彼女らは普通、そういったテーマを愛好(affect^(b))してやまないのだ。彼女らはほとんど、情念の高潔さ(justness)よりも

情念のあたたかさの方に、一層の喜びを感じているようである。私は、女性に対する礼節、そして敬虔を同じテーマと見なしている。なぜなら、実際それらは、このやり方で〔情念のあたたかさの方を喜ばれて〕扱われる場合に、同じものとなるからである。そして、それらがともに、全く同じ気質(Complexion)に依存していることを見てとることができるだろう。女性たちは優しく愛情に満ちた気質に溢れているので、そのことによって、この状況に関する判断がゆがめられ、女性たちは、不適切な表現や不自然な感情に満ち満ちたものによってさえも、簡単に影響を被ってしまうのだ。〔例えば、〕宗教に関するアディソン氏^(vi)の格調ある文章は、神秘的な敬虔について書かれた物と比較すればあまりにも味気なく、オトウェイ^(vii)の悲劇はといえば、ドライデン氏³の大仰さ(Rants)のためになかなか受け容れられないでいる。

[9]そうした女性たちには、この点に関して、彼女らの悪趣味を直してもらおうではないか。つまり、女性たちには、あらゆる種類の書物にもう少し慣れ親しんでもらおう。女性たちには、分別があるだけでなく博学でもある男性たちに働きかけて、自分たちとの交際に足しげく来てもらうようにしよう。そして最後に、女性たちに、学識者たちの

³ トマス・オトウェイの代表的悲劇は、『ドン・カルロス(Don Carlos)』、『孤児(The Orphan)』、『守られたベニス(Venice Preserved)』。ジョン・ドライデンは、その当時最も高名な英詩作家、またトーリー主義の熱烈な擁護者であり、演劇、詩歌、批評、そして古代人の翻訳で有名であった。ヒュームの念頭にはドライデンの英雄劇があるのだろう。これはしばしば、誇大で大げさな性格を備えている。

世界と会話の世界との間で私が画策し続けている連合に、心の底から同意してもらおう。もしかすると女性たちは、学識ある男性たちに丁重な態度(Complaisance^(viii))で接せられるよりも、普段から彼女たちに追随する人たちに丁重な態度で接せられることの方が多いかもしれない。しかし彼女たちが、[丁重な態度で接せられるとしても]そこまで誠実な情緒を[自分の追随者たちに]期待できないのはもっともなことである。だから私は、女性たちが実を捨てて名をとるような誤った選択をするという罪を決しておかすことのないよう願っているのである。

《用語解説》

(a) *Belles Lettres* : 上品な、洗練された、もしくは優雅な文学(polite, refined, or elegant literature.)

(b) *Affect* : を好む、気に入っている(to be fond of or pleased with.)

【訳者註】

(i) *human affairs*の訳語として、小松茂夫は「社会事情」「社会現象」「人間事情」「人間事象」「人事」などをあてており(ヒューム著、小松茂夫 訳『市民の国について(上・下)』岩波文庫、1952、1982年)、また田中敏弘は「人間の事象」「人事」などの訳語をあてている(デイヴィッド・ヒューム著、田中敏弘 訳『ヒューム政治経済論集』御茶の水書房、1983年)。

(ii) Gallantryの訳語として、小松は「艶事」「女性に対する言動と礼節」「女性に対する心やさしい言動と礼節」「女性に対する礼節ある言動」などの訳語をあて(小松、前掲書)、田中は「情事」と訳している(田中、前掲書)。

(iii) Pierre Corneille[1606-84]: フランス古典主義の劇作家。代表作は『ル・シッド』[1637]。

(iv) Jean Baptiste Racine[1639-99]: フランス古典主義を代表する悲劇作家。

(v) Devotionの訳語として、福鎌忠恕／斎藤繁雄は「信心」「敬虔」をあてている(デイヴィッド・ヒューム著、福鎌忠恕／斎藤繁雄 訳『奇蹟論・迷信論・自殺論 ヒューム宗教論集III』法政大学出版局、1985年)。今回この訳語に関しては、福鎌／斎藤を参考にした。

(vi) Joseph Addison[1672-1719]: 英国の随想家、詩人。

(vii) Thomas Otway[1652-85]: 英国の劇作家、詩人。

(viii) Complaisance の訳語として、小松は「丁寧な物腰」「丁重」をあてている(小松、前掲書)。また、ヒュームのエッセイ「趣味の基準について」(Of the Standard of Taste)の用語解説の中でミラーは、この語を「他人の欲求や要求に屈するような行為; 従順 (the act of yielding to the desire or demand of another; submission)」と解説しているが、浜下昌宏は「好意」と訳している(デイヴィッド・ヒューム「趣味の基準について」浜下昌宏 訳『現代思想』1988年9月号、p.182)。